

〔特産熱帯果樹等の安定生産技術の開発〕

ホワイトサポテの生産技術開発

～ホワイトサポテ炭疽病の発生状況と袋掛けによる発生抑制効果～

馬場 隆・大林隆司

(小笠原農セ)

【要 約】 ホワイトサポテの炭疽病は5月中旬から収穫終期まで、70%以上の果実で発病が認められる。開花後、早い段階での袋掛けにより、罹病率は10～23%となり、発生抑制効果が認められる。

【目 的】

小笠原村を訪れる観光客に向け、年間を通じた熱帯果樹の供給体制の確立が求められている。小笠原における果樹類の端境期である8～9月に収穫されるホワイトサポテは、有望な果樹の1つである。しかし炭疽病による被害が大きく、登録薬剤がないため、普及・生産拡大への大きな障壁となっている。本試験では、炭疽病の発生状況を把握すると同時に、袋掛けによる抑制効果を究明する。

【方 法】

亜熱帯農業センター圃場に定植した「バーノン」12年生と8年生各3樹、「マクディール」8年生2樹を供試した。調査は開花後の4月19日から収穫終了（「バーノン」10月4日、「マクディール」9月6日）まで週に1回、果実の炭疽病発生状況を調査した。圃場では殺菌剤無散布である。袋掛けは、小林製袋の「グレープD13号」を用いて4月12日（果高長2～3cmの幼果）、5月10日（果高長4～5cmの幼果）、6月14日（果高長5～6cmの幼果）に実施した。その後は週に1回、袋を開封して炭疽病の発生状況を目視により調査した。なお、肥大の途中で「グレープD19号」に掛け換えた。

【成果の概要】

1. 小笠原における無袋での栽培では、「バーノン」71.6%、「マクディール」72.6%と、高い割合で炭疽病の罹病が確認された。4月12日に袋掛けを行った場合は「バーノン」で23.1%、「マクディール」で11.1%と低い値を示した。袋掛けの時期が遅れると罹病果率は高くなり、特に「マクディール」は、5月10日以降の袋掛けで無処理区とほぼ同じであった（表1）。
2. 罹病果率は品種により推移が異なり、「マクディール」は「バーノン」に比べるとやや早く罹病した。「マクディール」では5月中旬から発病果がみられ、6月下旬より急増し、収穫終期まで続いた。「バーノン」での発生は5月下旬から緩やかに増加し、収穫終期まで続いた。また、幼果の他、果柄にも炭疽病がみられた（図1）。
3. 袋掛区は罹病果の発生が少ないが、発生のパターンは無処理区と同様であった（図2）。
4. まとめ：ホワイトサポテの炭疽病は5月中旬から収穫期まで続き、罹病果率は70%を超えた。ホワイトサポテには現在、炭疽病の防除を目的とした農薬が登録されていないが、早期に袋掛けを行うことで、炭疽病抑制の効果が認められる。

表1 ホワイトサポテの炭疽病罹病果率(%)

	バーノン		マクディール	
4月12日袋掛区	23.1	(39) ^a	11.1	(18)
5月10日袋掛区	42.1	(38)	66.7	(18)
6月14日袋掛区	50.0	(36)	75.0	(16)
無処理区	71.6	(251)	72.6	(57)

a)()は調査果数

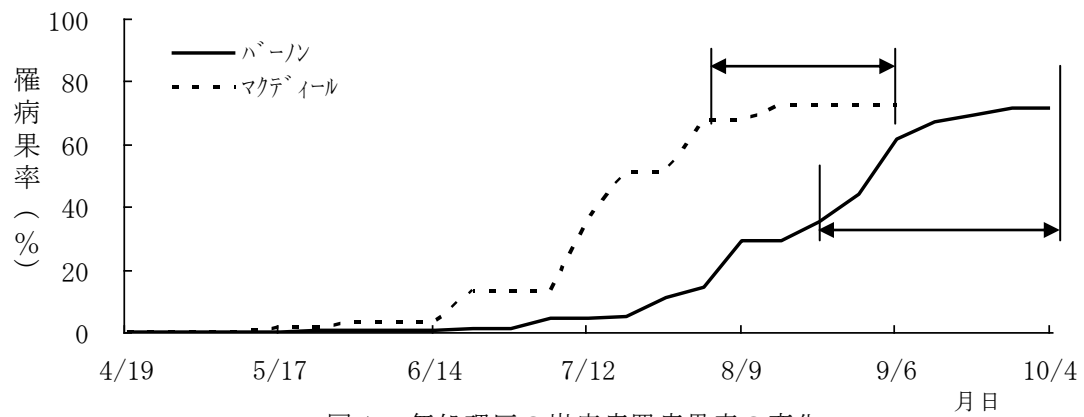


図1 無処理区の炭疽病罹病果率の変化

図中の矢印は各品種の収穫期間を示す

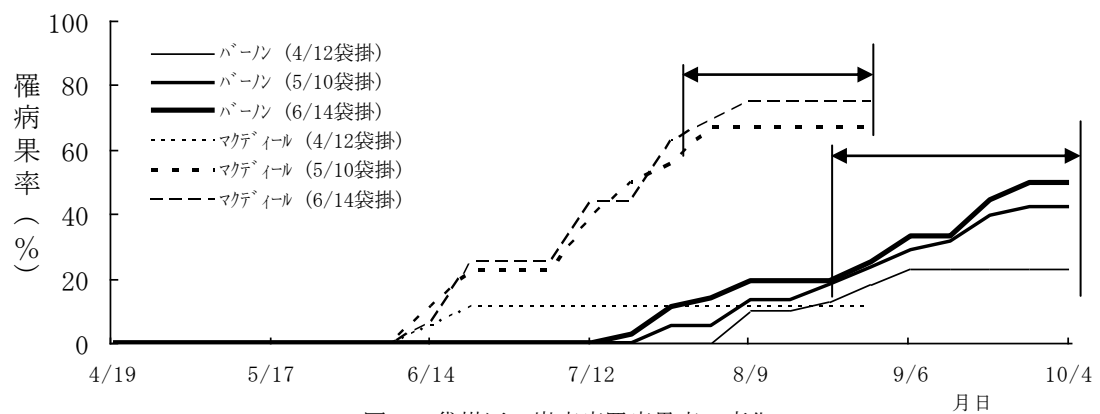


図2 袋掛区の炭疽病罹病果率の変化

図中の矢印は各品種の収穫期間を示す